

### 3 コミュニケーションに関する発達段階表（前言語期）

段階	前言語期（生後～16ヶ月程度）											
	聞き手効果段階（0～10ヶ月）						意図的伝達段階（10～12ヶ月）			命題伝達段階（12～16ヶ月）		
各段階について	大人が子どもの行動を何らかの意図を表すものとして受け取り、その意図を表情や状況から読み取って応えていくことで、やりとりが成立する。											
	【0～2ヶ月】	【2～4ヶ月】 （二項関係の成立期）	【4～6ヶ月】 （三項関係への移行期）	【6～10ヶ月】 （三項関係の成立期）		意図的伝達段階（10～12ヶ月）			命題伝達段階（12～16ヶ月）			
各段階の重要ワード	・周囲の環境に適応するための準備期。 ・生理的なものや快・不快の表明等が主である。 ・人に伝えようという意思ははっきりしていない。	・人や物の動きに対して注意を向けるようになる。 ・物を触るとどのような反応を示すか、といった自分の行動の結果に注意が向く。 ・大人からの働きかけにตอบสนองし、人や物に自ら働きかけるようになる。 ・相手の話を受けて応える、イントネーションを真似る、協応した動きをする、といったやりとりらしい関係が成り立つ。	・多くの場合、人よりもむしろ物に注意を向けるようになり、色々なものを転がしたり、叩いたり、なめたり、気に入った方法で働きかけを続ける。 ・積極的に物に働きかける。遊びが一段落したり、うまくいかなくなると、養育者や周囲の状況に気づく。 ・自分の要求をかなえてくれる存在としての大人の役割に気づく。	・要求の実現者としての大人に注意を向けるようになる。 ・興味関心が大人の意図に移行する。 ・大人の表情や身振り、行動からその意図を読み取り、自分の行動の社会的な意味について学習し始める。 ・発声や身体運動的な身振りで意図を伝えようとする。大人の意図に気づき始め、視線を使って大人に気持ちを伝え、確認しようとする。		・自分の伝えたいことを、社会化された伝達手段により他人に伝達することができる。 ・「～に～を～してもらおう」「～に～してほしい」といった「誰に、何をしてほしいか」が明確になり、社会化された伝達手段で伝えようとする。 ・渡す、見せる、指さすなどの身振りに発声や視線が伴うことが多く、これらの伝達手段を複合化して用いる。 ・子どもが伝えていることは分かるが、伝えたい内容が分からないことも多い。			伝達手段に単語（ことば）が加わり、やりとりの中で、社会的な身振りサインと発語を組み合わせて、意図を伝えるようになる。やりとりも長くなり、子どもは主権をとって遊べるようになる。 ・「マンマ」「バイバイ」など一語文の構造をもつが、伝えたい内容と発語が一致していない場合が多く、身振りなどの行為で内容を伝えていることも多い。			
	・生理的微笑（意図して笑顔ではなく、本能的に表出される微笑）	・社会的微笑（親しい人を見たときに微笑む） ・クレーン（舌を使わずに、「あ～」「う～」「えっえ」などの母音を発声する）	・喃語（「あうあう」「ばぶばぶ」など、子音を含む多音節からなる音を発声する。母音+母音もしくは母音+子音などの多音節の音を発声する）	・共同注意（人と物をお互いが見て、その人と一緒に何かの注意を向けること） ・三項関係（子どもと大人が一つの行為や対象を共有し合うこと） ・ショーイング（物をかざして、かかちつてくれる相手に見せる） ・クレーン（要求をするときに、大人の手を引っ張って目的を達成させようとする動作） ・志向の指さし（相手が指さした方向を見る。相手が指さした方向と一緒に指さしする）		・定位の指さし（新しい発見や対象を指さし、それを身近な大人に共感してもらうための指さし） ・伝達手段の複合化（視線、発声、行為を合わせて、意図を伝達しようとする。声を出して指さしをするなどの時間差の使用もできるようになる） ・言葉の獲得			・要求の指さし（自分の欲しい物を指差しで相手に知らせる） ・ごっこあそびの芽生え（物事の真似をして一緒に遊ぶこと）			
月	0～2ヶ月	3ヶ月	4ヶ月	5ヶ月	6ヶ月	7ヶ月	8ヶ月	9ヶ月	10ヶ月	11ヶ月	12ヶ月～16ヶ月	
各段階で見られる特徴	・音に対して動きを止める。 ・あやされると視線が合う。 ・生理的な微笑み。 ・音声に母音が含まれる。 ・生理的な快・不快がわかる	・あやされると相手を見て声を出す。 ・喉子音 ・顔のかたちを見て、自分から微笑み、声を出す（社会的微笑）。	・あやされると相手を見て、声を出して笑い、四肢を活発に動かす。 ・母親とそれ以外の人の顔の違いがわかる。 ・第三者に自分から微笑みかけ、発声することができる。	・あやされると、キャッキョッと声を出してはしゃぐ。 ・喃語が始まる。 ・口唇破裂音	・人見知りが始まる。 ・感情が分化してはしゃぐ。 ・落ちた物、わかっていることに対する探索的活動、期待活動が見られる。	・人見知りが激しくなる。 ・感情が分化し、あやされると機嫌をなおす。 ・音節をつらね、強弱、高低をつけ喃語をしゃべる。 ・声を出して要求・主張をする。（期待の手のぼしや相手に自分から発声し呼びかける。） ・玩具を取ると、取り返そうとする。	・好奇心がいっぱいで記憶力もつき、おもちゃを目の前で隠すと、隠された方向を向いて探すしぐさをする。 ・繰り返し行動（物を何度も繰り返して落とす。） ・よく抱いてもらっている人を見ると、自分から体を乗り出して抱いてもらいたがる。 ・自分の名前を呼ばれると反応する。 ・大人のミラーリング、音声のモニタリングがわかり、やりとりになる。 ・8ヶ月不安が見られる。	・バイバイをする。 ・繰り返し遊びややり取り遊びができるようになる。 ・叱られたことがわかり始める。 ・物をかざし、人に見せる（ショーイング） ・手をとって「やって」を要求する。（クレーン） ・「マンマン」などの志向の音声が出る。	・自分の名前を呼ばれてわかる。 ・ほめてもらうと繰り返す。（大人の言葉を理解して行動する） ・「ちょうだい」に対して、相手に差し出す。 ・相手との間で第三者を共有し始める。 ・いたずらが盛ん。 ・伝達手段が複合する。（指さしと発声） ・簡単な身体模倣ができ始める。 ・初語が出る。	・定位の指さしが始まる。（共同行為で絵本を見て、意味を察して指さしをする。） ・理解語が増えてくる。 ・相手のしていることに興味を示し、自分もやろうとする。 ・他の子の持っている物に手を出す。 ・「マンマ」などの定位の音声を出す。 ・ことばで模倣を引き出すことができる。つまり行動が芽生える。	・要求の指さし。 ・「～ではない～だ」の概念が芽生え始める。 ・感情表現が豊かになる。 ・ふり遊びができる。 ・だだをこねるが、きつかけがあると気持の転換ができる。 ・ことばで要求し、「イヤ」「ウン」「チガウ」「ソウ」の対感情が成立。 ・命名を基本にことばが30～40語ぐらいに増える。	
	生きるために大切な表出を備えている	親しい人の存在を知る 大人と同じものを見る「視線の共有」が成立する			外界を認知する力、探求する力が目覚しく発達 感情の分化が特徴的で、意図が出現してくる			試行錯誤による新手段の発見 柔軟な変化を伴う繰り返し行動			自他の区別ができる認識・コミュニケーション 社会性の画期的な節目	
各段階での支援の仕方	・自発的な動きを活かし、子どものペースで関わるようにする。表情や動きの変化を読み取りながら、子どもの手を取り、自分の身体やものを一緒に触る。（スキンシップ等） ・身体を通した関わりを多くする。（抱っこ、タッピング等） ・子どもの近くで、対面し、自然と目が合うようにやりとりを行う。 ・子どもの表情や動きを読み取り、それらしい意味づけをし、やりとりが継続できるようにする。（音楽、光振動などを使った遊び等）	・身近な人との関わりを認識し、深めるために、関わり方に特徴を持たせる。（サインを決める、抱っこ、揺れ遊び等） ・人と人の関係において、視線や気持ちをあわせ、気持ちを共有したり、要求が伝わったりするような体験ができるようにする。（目や声を使ってのやりとり遊び等） ・パターンを決めたやりとり遊びを楽しむようにする。（かかわり遊び等） ・子どもが理解しやすい、光や音が出るおもちゃと一緒に遊ぶ。（おもちゃ、楽器(鈴等)） ・大人も近くで関わりながら一緒に遊び、子どもの行動をほめたり、変化に応えたりすることで、三項関係へ発展させていく。（歌絵本等）	・子どもの気持やサインをよくとり、応答する。 ほめたり、同じように声を出したり、動いた場所をさわったりし、自分の表出と大人の反応との関係に意識が向くようにする。大人の関わりに行きが向くにくい場合は、子どもの興味関心がある活動の中に大人が入る形で関わる。  ・意思表示ができるよう、選択場面を設ける。  ・子どもの発信や身体の動きを大事にし、繰り返し行ったり十分に時間をとったりする。	・子どもの動きや声を真似することで、子どもにフィードバックし意図が伝わったことの実感が持てるようにする。  ・大人に注意が向くように、好きな歌と一緒に歌いかけたり、子どもの表出を真似したりする。また、繰り返し遊びの中で、バリエーションを付けたり、間をあけたりして、大人の行動に注目させる。（歌遊び、まねっこ遊び）  ・ものと人との間でやりとりができるようにして、子どもの発信を待ち、大人に注意を促す動き（声、動作、動き）を引き出す（子どもの好きな活動やわかりやすい活動の中に、大人が入り、表情豊かに接したり、子どもの視界に入ったりしながら関わる）  ・少しずつ間に介在するものを取り入れたり、操作を難しくしたりする。（パチヤヒも、スイッチなど）		・新しい伝達手段を獲得できるよう、見本を見せたり、繰り返しのことばかけをしたりすることで、適切な発信につながるようになる。  ・子どもの気持ちに寄り添い、ことばで質問したり、動きを言語化したりして伝える。（子どもに、選択・要求・拒否などを表現できる機会を与える。）  ・子どものことばや発信に、説明や補足を加えてフィードバックする。  ・模倣しやすいように、好きな動きを取り入れたり、簡単な動作やことばを取り入れた歌遊びをしたりする。（模倣遊び、見立て遊び）						

参考文献：坂口しおり（2006）『障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定』株式会社ジエース教育新社  
 橋本正巳（2016）『障害の重い子どもへのかかわりハンドブック～マルチアレンジングサポートの観点から～』社会福祉法人 全国心身障害児福祉財団  
 八束佳代（2014）『重度・重複障害のある子どものコミュニケーション能力の評価方法と発達段階に合わせた指導内容表の開発』  
 徳永豊（2014）『障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用』慶応義塾大学出版会株式会社  
 菊野春雄（2016）『乳幼児の発達臨床心理学——理論と現場をつなぐ』北大路書房